

言葉との邂逅

成長の限界 ドネラ・メドウズ/デニス・メドウズ著 ダイアモンド社

今後百年の間に、地球上での成長は限界に達するであろう。

We are running out of time!

二〇〇九年一月のダボス会議。

元米国副大統領のアル・ゴア

は、地球温暖化の危機について、

叫ぶように語っていた。会場で、

彼の鳴らす「我々に残された時間

は無い」という警鐘を聴きながら

心に浮かんだのは、「三

七年前、すでにその警鐘は鳴ら

されていた」との思いであった。

その警鐘とは、世界的なシンク

タンク、ローマクラブが発表した

『成長の限界』という報告書。

「人類の危機レポート」という

副題とともに一九七二年に出版

されたこの報告書には、次の深刻

な予測が語られていた。

「世界人口、工業化、汚染、食

糧生産、資源の消耗などの点で、

現在のような成長が続けば、今後

百年の間に、地球上での成長は限

界に達するであろう。その結末

は、人口と工業力の、突然の制御

不可能な減退であろう」

この報告書を作成したのは、

ドネラ・メドウズとデニス・メ

ドウズを中心とする研究者たち。

しかし、それから二〇年後、

彼らは、この『成長の限界』の

続編、『限界を超えて』という

報告書を、ふたたび発表した。

だが、そこに書かれている人

類の未来の予測は、一点を除い

て、まったく同じものであった。

「人間が資源を消費し、汚染物

質を産出する速度は、すでに持続

可能な速度を超えてしまった。物

質およびエネルギーのフローを大

幅に削減しない限り、一人当たり

の食糧生産量、エネルギー消費量、

工業生産量は、何十年か後には、

もはや制御できないような形で

減少するだろう」

では、違っている一点とは何か。

『成長の限界』では、危機の到

来が「今後百年の間に」と表現

されている。しかし、『限界を

超えて』では、それが「何十年

か後には」と表現されている。

この表現の変化。それこそが、

人類の危機の到来が「加速」さ

れていることを示している。

そして、その「加速」に対す

る強い危機感が、アル・ゴアの

警鐘の背後にある。

では、この加速する危機の前で、

我々人類は、時間を使い果たし、

混沌に呑み込まれていくのか。

その問いへの示唆を、メドウ

ズらは、二〇〇五年に出版した

三冊目の著書『成長の限界—人

類の選択』において述べている。

「人類はオゾン層の保護には成



功した。されば、この地球温暖

化の問題も、いま我々人類が、

意識を変え、最善の努力をすれ

ば、必ず解決していける」

その希望と励ましの言葉を読

むとき、いつも心に浮かぶのは、

ひとつの古い人生訓である。

「困難の時代においてこそ、

人間は成長する」

もし、そうであるならば、そ

れは、人類においても、同じ。

いま、まさに、我々人類は、

大きく成長し、成熟していくべ

き時代を迎えている。



田坂広志

多摩大学教授 ソフィアバンク代表

BOOK